

## 聖德太子傳曆正本の研究

藤 原 猶 雪

×

從來史家の間に太子傳曆の撰者は不詳とせられて未だ其の製作年時を明にしない。加之、本書には後世の註記攙入ありと認められては居るが未だ原文と後記とを峻別して復原されたことを聞かぬされば拙稿は暫く彼の傳文の史實に對する批判をやめ、主として此の遺されたる問題に於てのみ論攻することにしたと思ふ。而して豫め一言すべきは從來本書は其の成立晚くも平安朝（予の見る所では平安初期であるが）を下らざる太子傳の一大集成と考へられて居ながら、其の史的價值には乏しいと言はれてゐることに就てゐる。予も亦決して之を否むものではない。言ふまでもなく本書は史實の上に誤謬と不確とを存しては居るが、單に之を太子追慕の餘りに成つた宗教的文學的表現として批判すれば、其等の缺點は全く問題とならぬばかりでなく、殆ど顧みる價值を有しないと見做された奇怪な行蹟を傳ふる部分も、内面的には反つて有力なる觀察を加へたものと言ふことが出来る。況んや又其の時代に於て已にかゝる豐饒なる太子觀を有し、爾來我が民心に培はれつゝあ

つた太子傳爲るに想到せば反つて別個の意味に於ての史的價值をも占有することゝなる。かくて我が太子傳曆の撰者の功績は、決して冷かなる史料の價値の奈何に依つて速斷さるべきものでないと思ふ。予は今や聖德太子千三百年の御忌を奉迎するに臨みて、深く我が國民の腦裡に刻まれた太子觀の原始的集成たる本書の正本を考へ、以つて報恩の一端に備へたいと思ふ。然るに此の稿の腹案は未だ綴文發表の域に達せずして今暫く保留を要するものなれど、初め本誌に約したる光明本に現れたる親鸞聖人の研究の要は、發行の都合から三月の圖書館雜誌に掲載されたる聖人の影像と墓標に關する講演筆記の一部に收つたから、別に此の未定稿を起して債稿を償ふことにする。

## 一

我が國民が千古以來太子追慕の表現として傳承し來れる太子傳曆に對し、予の小かなる管見を披瀝するに當りて先づ現流本を代表するに足るものとして大日本佛教全書所收本を挙げたいと思ふ。

この本は元と延文五年五月下旬に例の閏年分安居の爲に五師重懷の書寫せるものを、更らに應仁二年九月九日法隆寺普門院に於て權律師寛清の轉寫せるものなることは左記の奥記に詳かである。

寫本云

于時延文第五曆仲夏下旬候今年潤月分相當傳之間依不所持馳筆訖 五師重懷<sup>三六</sup>

于時應仁第二曆戊子 九月九日於法隆寺普門院書寫之訖琳清<sup>堯順房爲所望之間且爲</sup> 聖德法皇恩德報

謝值遇結緣且爲後學稽古紹隆三寶利樂有情乍憚拭老眼如形奉移之畢 (卷) 此傳書寫第五度目 右筆權

律師寬清 年七十一  
戒五十六 南無日域元祖上宮聖德法皇內證救世大慈觀音菩薩

今この延文應仁本に現れたる傳曆の題跋撰號調卷を檢するに

(上卷初) 聖德太子傳曆上卷 平氏撰

(同卷) 聖德太子傳曆卷下

(下卷初) 聖德太子傳曆卷下 平氏撰

(同卷) 聖德太子入胎之始、在世之行、薨後之事、日本書記在「四天王寺壁」、聖德太子傳、并無名氏撰傳補

闕記等、其載「大槩」不盡「委曲」、而今逢難波百濟寺老僧、出「古老錄傳太子行事奇縱之書三卷」、與「四卷曆錄」比較年曆、未「錯誤」、余情大悅、載此一曆、恐以「言不經」、覽者致哂、庶不遺「小說」、貽「彼聖跡」、豈以專輒潤「色妙德乎」、贊曰

微哉佛法、杳矣玄風、過去無始、當來莫終、託生練骨、現死還躬、歷涉沙堺、微猷巨窮、

我伊太子、降跡王宮、垂化後世、知之有通、奇蹤妙轍、遺習緇衆、拾集成卷、庶傳幼童

聖德太子傳曆下卷終

とあつて佛教全書の考異にもある如く流布本には兩卷の題下に「分成上下」の四字を註するものが多く、法隆寺を始め閏年の安居に講讀されたる講録には都てこの四字が辯せられてあるに拘らず、右

の延文五年五月下旬潤月分安居の爲に書寫せる本に分成上下の註記を存しないことは、之を加へたものよりも多少後註的氣分の尠いことを想はせるが、大體に於て坊本の内容と相一致するから此の佛全所收本を以つて現流本の代表に充てゝ所論を進めることにする。却說この調卷撰號奥記は從來本書の編成年時と著者を考へる基礎にせられて古今の太子傳研究者が區々論證に努むる所であるが、順序として之を要約概説すれば左の五説を出でぬであらう。其一は聖德太子十三歳の時に百濟より來朝したる調子丸（當時十八歲）の手記あるものを稱出して之を奥記の奇蹤書に疑し、更に後世平氏の者曆錄等に合様して上下二卷に分つと想定し、撰號調卷にも合考したるもの。其二は同じく又太子に奉仕したる平郡ヘケリ（郡）の翁曆の撰と稱するものにて之に二種の傳がある。一は之を奇縱書に充て且つ翁曆は後に難波に住すと説き特に奥記に見ゆる奇蹤書出現の地理に合せんとするもの、但し單に平郡の翁曆撰と傳へて多くを考へないものあれど此れは暫らく略説と見て置かう。二是太子薨後廿四年に御即位の孝德天皇の勅撰に係り平郡の翁平基親と云ふ儒者をして専ら其の編纂に當らしむと傳へて奥記と撰號に合せんと期したるもの、又單に太子薨後二十四年平基親撰之とあるは恐らく此の略記であらう。其三は古來橘寺法空長老の口傳と稱し、本書を桓武天皇皇子葛原親王の原撰として謂ゆる前平の祖（實は其孫高望王の時初めて王氏を出でゝ平姓を賜り上總守となる）を以つて今の撰號に充て、更に分成上下の小註を考量したるものにや正曆年中基親季貞の二人日



本紀を合糅して二卷を成すと云ひ、又撰號に平氏とあるは増補者の一人基親の姓に據ると辨じて居る。但し單に葛原親王撰と云ひ又基親季貞の合編とあるは何れも其の一端を擧げたものと思ふ。然るに法空の平氏傳勘雜文には「未<sup>レ</sup>得慥正說」とあるから今の口傳なるものも決して彼れの定說ではないことが知れる。其四は法隆寺の顯眞得業の口傳と稱し太子滅後三百七十年一條院御宇正曆三年平基親の撰を傳へ、而かも傳曆の初に序を有するものありて此の撰號を存すと顯眞の古今目錄鈔に見ゆと云へるものがある。然るに吾人所覽の同書には「此平氏傳、正曆年中說云或又延曆年中支干相當文正字之遠作之歟、私無名氏撰是平氏傳也、以之爲正本也」とあつて平基親の撰とは定めて居らぬ。されど已に法空の雜勘文には此の説を出すからには別本のそれに此の傳があつたものであらうか。其五は單に平季貞の撰とするものであるが、或は前の基親季貞共編増修の説から分出したもので別に數へ立てなくてもよいかも知れぬ。

此の如く數説ありと雖も何れも單に撰號と跋文に調卷を合せて想像穿鑿したものに過ぎないが、古來第三第四の兩説が最も用ゐれて王林鈔の如きは橘寺法隆寺の二義の中に於て取捨意に任ずべし餘の諸義は用ふべからずとまで言ふて居る。

橘寺の法空は平氏傳雜勘文に「未得礎正說宜廻愚推可定之」と票して左記の如く簡龜ではあるが聊か傳曆の本文研究に觸れた史的案推を試みて居る。

先此傳中、引「日本紀」、日本紀以後製作也、而後日本紀者、人皇第四十代天武天皇清御原天皇也第五皇子一品舍人親王、竝從四位下太朝臣安麻呂等、奉勅撰之此事下卷終具勘之以知天武天皇以後撰之條一定也又此傳下卷中、引傳戒大師三卷傳、彼傳彼大師入滅之後出之、而彼入滅人王第四十九代光仁天皇寶龜七年也、既引彼七年以後傳、以知今平氏傳、彼七年以後撰之條又一定也

即ち所説は傳曆の中に日本書記と鑒眞傳を引く上は日本書記勅撰の天武天皇御宇三十三以後なること一定とし（實は下に考ふる如く本書に日本紀とせず日本書記として引くから弘仁三年以後の證となるが）更らに進んで鑒眞入寂の光仁天皇寶龜七年（天平寶字七年三十四の誤）以後にありと論結し、決して其の撰述は奈良朝末期を上るものでないことに限定したのである。

然るに此の如く傳曆所引の書籍の成立年代より見て本書の撰時を考査せんとすれば其他に本願緣起、七代起、曆錄等のそれをも考へなくてはならぬ。更らに又跋文に見ゆる在四天王寺壁の聖德太子傳、補闕記、奇蹤書にまでも之を及ぼすべきである。されば此等も一應剖檢して見やう。先づ七

代記は古今目録鈔に「寶龜二年<sup>三</sup>敎明作」とあるから鑒眞傳よりも八年後に傳曆の成立を限定することになり、跋父に見ゆる四天王寺壁に在る聖德太子傳は佛敎全書所收本に示す點の如く「日本書記在四天王寺壁、聖德太子傳」でなく「日本書記、在四天王寺壁聖德太子傳」と點讀すべきものゝやうに思へるから、此の太子傳は恐らく平氏傳雜勘文に「明一傳歟或又卽壁記文等歟」と註する明一の太子傳にあらずして謂ゆる「繪堂、太子堂ノ側ニアリ聖武天皇草創、太子一生ノ始終ヲ繪トシテ此堂ニ納シメ給フ」名跡集どころの繪傳ではなからうか。果して然らば天平寶字以前の史料にして今の所要たる限定的價値を有しないことゝなる。而して又奇蹤書も其の發見に依つて本書の發生を見たのであるから其の發見年時の不詳なる限り本書の成立を何等制約するものでない。されば殘されたる引用書は本願緣起と補闕記と曆錄であるが、先づ上宮聖德太子傳補闕記の成立を考ふに卷初に

日本書紀、曆錄、并四天王寺聖德王傳、具見行事奇異之狀、未盡委曲、憤憤不<sub>レ</sub>尠、因斯略訪<sub>レ</sub>者舊、兼探<sub>レ</sub>古記、償得調使膳臣等二家記、雖大抵同<sub>レ</sub>古書、而說有奇異、不可<sub>レ</sub>捨之、放錄之云爾とある中、四天王寺聖德王傳とは向に擧げたる繪傳なるべく、又日本書紀の名は日本後紀の弘仁三年<sup>一四</sup>六月戊子の條に「是日始令參議從四位下紀朝臣廣濱、陰陽頭正五位下阿倍朝臣眞勝等十餘人讀<sub>レ</sub>日本紀、散位從五位下多朝臣人長執講」とある弘仁私記の序に「夫日本書紀者、一品舍人親王

淨御原天皇第五皇子也從四位下勳五等太朝臣安麻呂等玉子神八非耳命之後也奉勅所撰也釋日本記開題

衣に曰、日本書記もとは日本紀と題られたるをおほよそ弘仁の年中より文人たちの書字を加へて日本書記とも稱へるより起りて遂に題名となりしと見えたりといへば補闕記は弘仁三年以後の編成なることが先づ想見せられる。而して曆録は古來日本書記の第十九欽達廿一用明廿二推廿三の四卷を指すと云はれて居るが、今書記と本書所引の曆録の文とを對照するに

曆録曰。皇女懷胎之日。巡行禁中。當厩戶生。因以爲名。身有聖智。兼知未然。内外二教。無妙不通。天皇愛之。令居宮南。故稱上宮太子。今謂坂田寺是其宮處矣。是歲。四天王始壞移。建難波荒陵東下。

備考。右は佛教全書所收本の本文なれど豐浦寺・阿彌陀寺・安井門跡の三本には何れも註文に作る。(但し佛教全書に考へたる一本は曆録以下二十一字を今謂以下十字を註文とし他は本文に作る)而して此文を初め以下所引の曆録の文は管家正本になし。

廿一年癸酉冬十一月。太子奏。作掖上池。畝火池。和

〔推古紀〕皇后懷妊開胎之日。巡行禁中。監察諸司至于馬宮。乃當厩戶。而不勞忽產之。生而能言。有聖智。及壯一聞十人訴。以勿失能辨。兼知未然。且習内教於高麗僧惠慈。學外典於博士覺智。兼悉達矣。父天皇愛之。令居宮南上殿。故稱其名。謂上宮厩戶豐聰耳太子。秋九月。改葬橘豐日天皇於河内磯長陵。是歲。始造四天王寺於難波荒陵。

〔推古紀〕二十一年冬十一月。作掖上池。畝傍池。和

珥池。又自難波至京。始治大道。同月十五日太子

曆錄曰十二月

命駕。巡看山西科長山本墓處。還向之時。卽日申

時。枉道入於片岡山邊道人<sub>レ</sub>家。卽有飢人臥道

頭……

曆錄曰。衣裳帖置棺上。詔取其衣。自服如常。時人

異之者。

備考。佛教全書所收・豐浦寺・阿彌陀寺・安井門跡の四本何れも註文に作る。

曆錄附云。隋煬帝太上皇。爲宇文化及等。所殺於

江都。恭帝遜位于唐王。唐高祖神堯皇帝受隋禪。

卽皇帝位。改元武德。隋滅唐興云云。

曆錄中云。夏四月。一僧犯重罪。天皇詔曰。夫僧頓

珥池。又自難波至京置大道。十二月庚午朔。皇太子遊行於片岡。時飢者臥道垂……

備考。上段に出す曆錄曰十二月の六字は佛教全書本及び豐浦寺、安井門跡の兩本共に註文同月十五日に對する校異の文とすれど阿彌陀寺本（並に佛教全書に考へたる一本）には此の十一字本文に作る。但し管家正本には此の註と校異なし。

〔推古記〕唯衣服疊置棺上。於是。皇太子復返。使者令取其衣。如常且服矣。時人大異之曰。聖之知聖其實哉。逾惶。

### 〔推古紀〕

備考。上段の文は佛全所收・豐浦寺・阿彌陀寺・安井門跡の四本共に註文に出づれども日本書紀には之と對照すべき文なし但し安井門跡本に校せる異本（並に佛教全書に考へたる一本）には上文は本文に作る。

〔推古紀〕三十二年夏四月丙午朔。戊申。有一僧。執

歸三寶。何犯惡逆。非獨僧之罪。諸僧亦有罪。

備考。佛教全所收。豐浦寺。安井門跡の三本は何れも註文に作れど阿彌陀寺本（並に佛教全書に考へたる一本）は之を本文に入る。因に佛教全書所收の法隆寺本に略録とあるは恐らく曆錄の誤植と考へる。

十一月。入鹿臣獨謀。遣小德巨勢臣德太等。率兵弑山背大兄王等於斑鳩宮。於是。大兄王奴三成率數十人拒戰。出於萬死。鋒不可當。然而大兄王取獸骨。投置內寢。率子弟從間道出。隱膽駒山。軍燒斑鳩宮。見骨灰中。軍衆皆謂王已死。解圍退去。大兄王謂左右曰。我以一身豈煩萬民。不欲使言後世之人由吾故而喪父子兄弟。卽還斑鳩宮。遂與子弟等自絞而死。干時。雲色變化爲五色幡蓋。種々妓樂照灼於空。臨垂於寺。有人指示入

斧毆祖父。時天皇聞之召大臣。詔之曰。夫出家者賴歸三寶。具懷戒法。何無懺忌。輒犯惡逆。今朕聞有僧以毆祖父。放悉聚諸寺僧尼以推問之。若事實者重罪之。於是集諸僧尼而推之。則惡逆僧及諸尼並將罪。

〔皇極紀〕十一月丙子朔。蘇我臣入鹿遣小德巨勢德太臣。大仁土師娑婆連。掩山背大兄王等於斑鳩宮。於是。奴三成與數十舍人出而拒戰。土師娑婆連中箭而死。軍衆恐退。軍中之人相謂人曰。一人當千謂三成歟。山背大兄仍取馬骨。投置內寢。遂率其妃並子弟等。得間逃出。隱膽駒山。三輪文屋君舍人田目連。及其女菟田諸石。伊勢阿都堅經從焉。巨勢德太臣等燒斑鳩宮。灰中見骨。誤謂王死。解圍退出。由是山背大兄王等四五日間淹留於山。

鹿變爲黑雲。大臣聞入鹿殺大兄王等。歎曰。我亡

不久。是曆錄  
文也

備考。佛金所收・豐浦寺・阿彌陀寺・安井門跡の四本に是曆錄  
文也の註あれど管家正本になし。

不得喫飲。三輪文屋君進而勸曰。請移向於深草屯倉。從茲乘馬詣東國。以乳部爲本。興師還戰。其勝必矣。山背大兄王等對曰。如卿所導。其勝必然。但吾情冀十年不役百姓。以一身之故。豈煩勞萬民。又於後世不欲民言由吾之故喪已父母。豈其戰勝之後。方言丈夫哉。夫損身固國。不亦丈夫者歟。有人遙見上宮王等於山中。還導蘇我臣入鹿。入鹿聞而大懼。速發軍旅。述王所在於高向臣國押曰。速可向山求捉彼王。國押報曰。僕守天皇宮之敢出外。入鹿即將自往。于時。古人大兄皇子喘息而來問。向何處。入鹿具說所由。古人皇子曰。鼠伏穴而生。失穴而死。入鹿由是止行。遣軍將等求於膽駒。竟不能覓。於是。山背大兄王等自山還入斑鳩寺。軍將等則以兵圍寺。於是。山背大兄王使三輪文屋君、謂軍將等曰。吾起兵伐入

三年甲辰冬十一月。大臣並入鹿。起二家於甘樞岳上。大臣家外作城垣。積貯兵食。又氏々人等侍其門。名爲祖子孺者。大臣傲奢。無君之意。日々彌深。時人危之。故天皇讓位於皇太子。自爲皇祖母尊。是復曆錄文也。

備考。佛教全書所收本は是復曆錄文也の六字を本文に納れしに對し豐浦寺・阿彌陀寺・安井門跡の三本共に註文に作る。而して管家正本に此五字なし。

聖德太子傳曆正本の研究

鹿者。其勝定之。然由一身之故。不欲傷殘百姓。是以吾之一身賜於入鹿。終與子弟妃妾一時自經俱死也。于時。五色幡蓋。種種伎樂。照灼於空。臨垂於寺。衆人仰觀稱嘆。遂指示於入鹿。其幡蓋等變爲黑雲。由是入鹿不能得見。蘇我大臣蝦夷。聞山背大兄王等惣被亡於入鹿。而罵曰。噫入鹿極甚愚癡。專行暴惡。爾之身命不亦殆乎。

〔皇極紀〕冬十一月。蘇我大臣蝦夷兒入鹿臣。雙起家於甘樞岡。稱大臣家。曰宮門。入鹿家曰谷宮門。谷此云波佐麻稱男女曰王子。家外作城柵。門傍作兵庫。每門置盛水舟一。木鈎數十。以備火災。恒使力人持兵守家。大臣使長直於大丹穗山造梓削寺。更起家於畝傍山東。穿池爲城。起庫儲箭。恒將五十兵士繞身出入。名健人曰東方儼從者。氏



(參考)

又說辰午年四月三十日夜半。災斑鳩寺。而曆錄不

記。此年是推古天皇十五年矣。

氏人等人侍其門。名曰祖子孺者。漢直等全侍二門。

備考。上文は天智九年庚午の錯入にして天智紀九年夏四月の條に「壬申夜半之後災法隆寺一屋無餘大雨雷震」とある。因に此年以下十一字佛金一所收本並に安井門跡本に校する異本は本文に作れど豊浦寺・阿彌陀寺・安井門跡の三本共に註文をす。但し管家正本に上記の全文なし。

以上の對照は一見して曆錄なるものが書紀における太子關係の部、即ち欽明天皇より推古天皇に至る十九、二十、二十一、二十二の四卷の稱に非らざることが知れる。然るにこの對照は大體において兩者の記事一致し曆錄は書紀を要約せるものにて彼此具略の違あるのみに似たれば書紀の拔書にあらざるかとも考へられざるにあらざれども、予は不幸にして之をしも否認せざるを得ない。何となれば右の對照における第四に擧げたる曆錄附云の文は一步を譲り書紀より拔書したる人の附言と解して此を推古紀に見出さるは怪しむに足らずとするも第七文中「故天皇讓位於皇太子自爲皇祖母尊」の事實は何等書記の上に之を認めず、皇極天皇の孝德天皇に讓位し給へるは翌年六月にして皇極紀四年六月の條には「庚戌讓位於輕皇子立中大兄爲皇太子」とある。此の如きは曆錄が決して單に書記の拔粹とは見え、他の要素をも含めるものなること必定にして佛教全書所收補闕記の

點に「日本書曆錄」とあるは正に「日本書記、曆錄」即ち日本書記及び曆錄の意に解すべきであると信ずる。されば曆錄の成立は書記のそれを以つて律することは出来ないのである。然れども今の逸文に現はれたる曆錄は日本紀に甚だ多く據りたるものゝ如くなるを以つて日本紀編纂の後なることは想像に難からざるも、弘仁私記との前後は之を定むることが出来ない。故に補闕記の成立は依然として弘仁三年以後と限定するより今日の場合他に途がないやうである。が此の補闕記を含む（其名を奥記に見るのみでなく本文にも其文が引用されて居る、下に至つて對照する考である）傳曆の撰時は七代記を含むそれよりも尙四十一年近く限定せらるゝことゝなつた。而して終に太子の眞撰と傳ふる本願緣起の成立年代を考ふに、本書は卷首に「四天王寺御手印緣起」と題し卷首に「乙卯歲正月八日皇太子佛子勝鬘」とありて、古來推古天皇三年正月八日に聖德太子の親撰し給ふ所と稱せられてあるが文に佛教渡來の記事中「相當欽明天皇治天下壬申歲也」又「相當敏達天皇治天下丁酉歲也」等と御謚號を以つて記すが如きは一見して後人の假託に係ることが知れる。されど其眞偽は暫く別にするも佛教全書に收むる本の奥に「寛弘四年八月一日此緣起文出現郷都維那十禪師慈蓮金堂金六重塔中求出之、一條院御時圓融院第一御子長吏慶算定額之時」とありて、太子傳古今目錄鈔にも「太子御入滅已後四百餘歲比十禪師慈運祈之自金堂内求出、十種供養拜見之」とあれば、本書は寛弘四年一六七に至りて始めて發見せられたもので此より近き以前に於ては見る事を得なかつたのである。然

るに傳曆は七代記を引くによつて寶龜二年<sup>三二四</sup>以後、奥書に日本紀を日本書記と呼ぶことによつて弘仁三年<sup>七二四</sup>以後に成ると考へられたから、恐らく弘仁寛弘の間に於て本願緣起を引用すること不可能なりせば、傳曆は本願緣起を引くことによつて寛弘四年<sup>七六六</sup>以後の撰述と考ふべきこととなる。

予は此の如く傳曆に引用されたる書籍の著作年時を考案して傳曆をして遂に寛弘四年以後の撰述に歸せしむることゝなつた。かくて予は轉じて反對に本書を引用したる方面よりも深及して兩疊を突き以つて眞箇に近き撰時を得たいと思ふ。則ち先づ「嘉祿三年一八八七應鐘下旬中明於天王寺東僧房書之」の奥記ある法隆寺顯眞の太子傳古今目錄鈔に平氏傳の名を出すこと前述の如く、又左府賴長の台記に出ずる久安四年<sup>〇八八</sup>九月鳥羽法皇の四天行寺行幸に隨ひ上下二卷の太子傳を閲讀したと云ふ「十四日己亥午刻見聖德傳上了<sup>去十二日始見之</sup>」借當時權別當前律師行祐所見也」及「十七日壬寅巳刻見聖德傳下了去十二日始見之、若無太子、豈離三途、一稱南無、唯太子恩」の記事は恐らく平氏傳曆であつたと言考へる。されば此等は共に寛弘四年以後にして傳曆の寛弘久安の間に成れることを證するものと云へる。然るに「釋迦牟尼佛隱給ヒテ後一千九百三十三年ニ成ニケリ（中略）于時永觀二タ年セ中ノ冬ナリ」の序ある源爲憲の三寶繪詞に「日本紀、平氏撰聖德太子、上宮記、諸樂古京藥師寺沙門景戒撰日本國現報善惡靈異記ニ見タリ」とあるは、永觀二年<sup>四一六</sup>以前に傳曆の已に成立したる根本史徴にして寛弘に先立つこと實に二十餘年である。——かくて前後兩端より攻究したる結果は意外にも二十餘

年前の書(傳曆)に二十餘年後の書物(本願緣起)が引用せらるゝと云ふ奇態を生ずることゝなつた。されど或は本願緣起における寛弘四年は四天王寺内の發見年時に過ぎざれば、傳曆の撰者は此より先永觀二年前に本願緣起に接手したるの證徴にして何等傳曆の成立年時に對し矛盾を與へるものでなく、反つて本願緣起の著作年時に對し發見よりも更らに二十四年の眞に近かしめたものではなからうかと斷ずる人があるかも知れぬ。されど予は不幸にしてかゝる樂觀に据することは出来ない。然り而して此の疑問を解くべき秘鍵は一に予の謂ゆる正本に存するのではなからうか。

### 三

太子傳曆に引用されたる古書並に傳曆を引用したる書籍の成立年代を攻究して傳曆のそれを考へんとする研究法は傳曆の撰時不詳なる限り是も直接に有力なるものである。然るに今や本書の撰述年時と、原型とが或る信すべき理由を以つて別に管窺せられ、殊に傳曆の本文に引用する書籍の全部は後日の補註的攙入なることが知らるゝ上は前述の考究は一見無價値のやうではあるが、これは一面に傳曆研究の史的開展を跡づくるものとして保留すべきものであらう。故に以上煩を厭はず敢て開序に充つることにしたのである。かくて予は將に本論に入りて新しき一管見を披瀝すべき秋となつた。——東京帝國大學附屬圖書館藏書に太子傳傍註(外題)なるものありて先づ左の奥記を見

る。

□水(采也)

古今註此御傳書誠爲不少也而以搜說諸法隆天王等之精舍爲要不竭力諸國史及百家正記故失其實者亦爲不少也(蒙潮) 幼好讀此御傳討論諸家說不措手日久矣以管見之所及加傍注爲講習之扶也一門之外不可敢許他見者也 (采也) 蒙潮 有月有花

本書は蒙潮なる人の自著自筆にして表帋には向つて左に「太子傳傍注上(采也)蒙潮」右に「久遠院藏本」その傍に「□水」(采也)とあつて下巻も之に同じい。但し蒙潮の朱印は奥記におけるものよりも少し大型の別なものが押され（此の他に下巻内題の下にも蒙潮の朱印ありて表帋のと全く同じい）て居る。而して本書の時代は之に對校したる菅原爲長書寫にかゝる太子傳曆の書入「和長書シテ云畔子ノ故事在孟子」の文字が其儘本書にも寫出されてあるから享祿二十年二月二十日に七十歳にて薨じたる尊卑分脈菅原和長東切城の時代を朔るものではないが書風から見て慶長を下るものとも想はれぬ。予の寡聞は蒙潮なる人を未だ考へ得ざる今日、元より之を確かむることは出来ないから享祿慶長間の考註を想像するに止める。然るに此の太子傳傍注に收むる本文即ち聖德太子傳曆は右の奥記の前に

致此傳曆之寫功者當第十六世住持靈波長老存命之時此料紙雖被認置既有本來佛杲之唱以降積星霜成輕塵云遺弟比丘印秀迎御忌爲報恩謝德持者爲先師得脫豐浦寺寶藏寺外不出御本中出於橘寺五室書寫畢 嘗文明四年壬辰七月七日佛子印秀

の如く原本の奥が保存されて居るから文明四年に印秀が其師靈波の遺志を繼ぎて橘寺太子建立にて書寫せるもの、轉寫であることが知れる。而して此の文明本は其の奥記にもある如く大和豐浦寺曾我稻目建立寶藏寺外不出の秘本の轉寫にして、其の豐浦寺本には洛東安井門跡の本と南都一心院末阿彌陀寺の本とが對校されてあつたことが、文明本に豐浦寺本の奥記を残して今の太子傳傍注に下記の如く（文明の奥の前に）轉寫されて居るに依つて知れる。

彼本、奥書云

以洛東安井門跡文庫之本並南都阿彌陀寺一心院末寺而本校合者也 兩本大槩同矣墨文

字安井朱文字阿彌陀寺本也墨朱ノ兩點亦爾也 吉野郡北曾現光寺可空

阿彌陀寺本之卷尾云 本記云保安五年三月十三日書了僧了僧莊嚴以同十四日點了是法隆寺本也點

師僧文朝但點本者石見入道並守朝已講被點本藥脱カ（師）寺律師御房點撰御座本以點寫耳

これに據ると豐浦寺本は比曾現光寺古の比蘇寺今の吉野寺の可空の寫傳であつて、對校に用ゐた二本の中の阿彌

陀寺本は保安五年法隆寺本の轉寫であることが解る。而して其の法隆寺本には恐らく太子傳別要に

「相承一本傳奥書ニハ」として引く

以石見入道并守朝已講被點之本藥師寺前律師御房被點撰御座本以之點馬保元（安カ）五年三月

十三日文朝

の奥記があつたであらうと想像することが出來て法隆寺所出の傳曆中最古の面影に接するのである

因みに法隆寺における太子傳曆は其後流出したるものゝ如く、嘗て明治四十四年六月十一日東京美術學校に於て太子祭典の展觀ありし時、法隆寺より太子御傳記に關する圖書廿餘點の多きを出品せしに柄らず本書の寫本一もなかりしは當時出陳に値する古寫本を襲藏せざりしと想像することが出來（傳曆の出陳は奥に右太子傳者和州法隆寺一校畢寛永五年八月野田庄右衛門とある印本に過ぎなかつた）現に奈良帝室博物館に陳列する「觀應二年辛卯仲春下旬比於法隆寺別院上宮王院北面寮寫之訖願以傳記書寫之切必爲太子值遇之緣右筆仲甚（上卷）觀應二年辛卯初夏上絃候於洛陽中御門町光林寺口局寫之訖願廻一筆元微功速成二利之大行而已右筆仲甚（下卷）」の奥ある古寫本の如きは近時法隆寺の有に飯したものである。此の外に阿波本願寺に藏する「乾元貳年癸卯初四月二十六日於法隆寺西室第六坊申時許書寫了、□□□□、爲出離生死頓證菩提乃至法界衆生平等利益耳（上卷）」の奥ある國寶明治四十八年聖德太子傳曆ありて共に法隆寺系統に屬し法隆寺本と稱するに足ると雖も、其の古寫なる點に於て到底保安の阿彌陀寺所傳法隆寺所出本に優るものではない。予は幸にも此の平安朝における法隆寺本の面影を太子傳傍註に校異として現はれたる阿彌陀寺本（豐浦寺本の校異に出づる）に依つて知ることが出來たのである。然り而して太子傳傍註には前記豐浦寺本の奥記の前紙即ち本文の最後「聖德太子傳曆卷下尾」の次の餘白に

青者以洛東安井文庫書本校合之（シルシ）標也

朱者以南都阿彌陀寺一心院未寺本校合之標也

紫者以管原爲長卿、自筆本校合之標也此自筆、正本干今五條殿秘藏し玉ふなり

とあるは想ふに蒙潮の注記にして元と豊浦寺本に校合されたる安井門跡本と阿彌陀寺本の校異は其儘に繼承され、豊浦寺本にては安井門跡本は墨字なりしが今は傍註との混亂をさけて青字に標されたのである。然るに紫字を以つて謂ゆる管家正本との對校を標出せるは豊浦寺本に見ざる所にして此の太子傳傍註獨存の校異即ち蒙潮自らの校合したもので、上冊裏表帋の内面にも紫書にて「紫墨以管家正本改字改點」と記されて居る。

かくて略我が太子傳傍注の本文が如何なる性質を有するか、想察されて其の史的價值を認むるに足ると信するが、再び中に含まれたる古寫本を列舉して之に注目することにした。

本文―現光寺可空の校寫せるもの、豊浦寺寶藏にありしを文明四年橘寺に出して印秀の轉寫せるものに就き享祿の後蒙潮の轉寫したるもの

(青) 現光寺可空の對校したる安井門跡本

校異―(赤) 阿彌陀寺本、即ち保安の法隆寺本

(紫) 蒙潮の對校したる管家正本



#### 四

予の謂ゆる聖德太子傳曆の正本とは蒙潮の太子傳傍注の本文へ彼れが菅原爲長の書寫にかゝる傳曆を對校したるによりて初めて之を知りたる菅家本の還元にある。これ實に予の管見に於ては傳曆の原型たること疑を容れず、彼の佛教全書に收むるものゝ如きは後世の攙入甚だしきものにして安井門跡、阿彌陀寺、豐浦寺の諸本も共に佛教全書本の如き攙入ありて正本に非らざること勿論なれど佛教全書本に本文として攙入せるものが未だ割註の文として存するが如き現流本の過渡を示すものと考へる。

茲に於てか予は將に太子傳曆の正本を復原すべく現流本の代表たる佛教全書本と對照せねばならぬ。則ち佛教全書本を本文として墨書し之を我が太子傳傍註に現はれたる菅家正本を以つて朱訂せば頗る敘述に便宜なれども雜誌論文としては許されぬ事でもあらうから遺憾ながら削除するものとす。——然るに此の對照の結果として展開する所は都て菅家本の正本たる事を強要するの觀がある。予は其の注目すべき百十個所を摘發して菅家本の正本たる所以を釋明することにした。先づ初に彼此本文なると註文なると轉換されたるに過ぎずして文の上に加除の相違なきものより、次に全く原文を後世消滅したるものに移り、最後に原本になき文の後世先づ註文として加へられ、次で

本文として摺入するに至りたることを述べやうと思ふ。

第壹に轉換、これを二に分つて

一、菅家本の割註を現流本に本文とするもの

(1) 猶居東宮(佛全本第一頁下段)

(2) 合十二階 十四上 但し菅家本には階の下に也の字を入る

備考 豊浦寺阿彌陀寺安井門跡の三本に徵照するに(1)は三本共割註に作れども(2)は阿彌陀寺本に限つて本文に收めて居る。故に此の對照のみにて判すなれば、豊浦寺安井門跡の兩本は菅家本に全く一致し阿彌陀寺本は恰も菅家本と現流本との中間にあるものと云へる。

二、菅家本の本文を現流本に割註とするもの

(3) 唯以大連乃至相與商量(七下)

(4) 長八尺(十一上)

備考 豊浦寺阿彌陀寺安井門跡の三本も亦本文に作りて菅家本に同じ。

三、附菅家本の隋を現流本に唐とするもの

(5) 遺於大唐(十七下) 菅家本は大唐の二字を隋の一字に作る

(6) 採掠大唐(十九下) 同上

備考 豐浦寺阿彌陀寺の兩本は隋、安井門跡本は唐に作る。——以上の轉換異より見れば豐浦寺本は菅家本に一致し、阿彌陀寺安井門跡の兩本は現流本に近かんとする曙光を示すものと考へる。

第貳に消滅、後世原文を削落して消滅に歸したもの

(7)靈異有貴相(「下」不妄啼哭)の次)

(8)佛陀加護故云(「四上」數月不滅)の次)

(9)後用花芭之基也(「十七上」車駕而覽之)の次)

(10)殿下之言 廿一上「今遙想」の次(爲「同」昔)の次)

(11)堅造房舍彌斷臣之子孫曾孫及兄弟蓮枝等(「廿七下」世世相繼)の次)

備考 (7)(8)(9)は豐浦寺阿彌陀寺安井門跡の三本にもなければ(10)(11)は此三本にも確存して居るから現流本は轉寫の間に削落したものであらう。而して復、豐阿安の三本が菅本に一致するものに對し現本に同ずるもの三なるは略其の中間に位するものなることを具體的に證して居る。

第參に攙入、菅家本に絶無の文が現流本に増補攙入せしもの、これを本文として攙入せるものと註文として加へられたるものに分つ。

一、註文 更に引用別に分つて

イ、曆録の文

(12) 曆録曰十二月<sup>廿二上</sup>「同月十五日」の次

(13) 曆録曰衣裳乃至時人異之者<sup>廿二下</sup>「紫袍者無」の次廿二字

(14) 曆録附曰隋煬帝大上皇乃至隋滅唐興云云<sup>廿四下</sup>「駱駝一疋」の次五十二字

(15) <sup>(曆)</sup>略録中云夏四月乃至諸僧亦有罪<sup>廿九下</sup>「致此不孝乎」の次卅六字

(16) 是略録文也<sup>(卅一下)</sup>「我亡不久」の次

備考 豊浦寺安井門跡の兩本にも亦以上の註文見え、阿彌陀寺本は(13)(14)(16)の三文は註なれど(12)(15)の二所は本文に納れてある。此の如く初め註文として増補されたものが終に本文となり原文との別を認め難きに至ることは特に注意を要する。

ロ、本願緣起の文

(17) 本願緣起云守屋臣乃至國家壞失矣<sup>(七下)</sup>「斬大連頭」の次百卅九字

(18) 本願緣起云子孫從類乃至悉計納寺分矣<sup>(七下)</sup>「已上十九字傳文」の郎百十八字

(129) 本願緣起云敬田院乃至相當敏達天皇治天下丁酉歲也<sup>(十上)</sup>「建難波荒陵東下」の次二百六十五字

(0) 本願緣起文云臣忝乃至歲次乙卯<sup>(十下)</sup>「如遭慈父慈母」の次九百七十二字

(18) 註文<sup>(17)</sup>本文に作る。

備考 豊浦寺安井門跡の兩本は註文、阿彌陀寺本は

# ハ、七代記の文

(21) 七代記云南岳衡山乃至已上七代記等(十七下)是南岳也(の次五百四十八字)

(22) 七代記云飢人者若達磨歟(廿二上)進答歌日(の次)

(23) 大唐國乃至遠祖不聞云云(廿五上)流通佛法(の次三百八十四字)

備考 (21)は豊浦寺阿彌陀寺安井門跡の三本共に註文、(23)は阿彌陀寺本の本文に作るを除きて豊安兩

本復註文、然るに、(22)は三本何れも菅家本と同じく此の文を存しないが之れは大に注目すべきであらう。

## ニ、補闕記の文

現流本を初め豊浦寺阿彌陀寺安井門跡の諸本に補闕記の文を引くは補闕記曰とせざれど明かに同書より引用せるもの十一文を擧げることが出来る。便宜上その對照をも併記することにした。

(24) 一云擎立軍鋒(七上)置於頂髮(の次)

(25) 時年四十九或說壬午年者誤也(廿八上)「知遷化」の次)

但し此文は補闕記に對檢したる文にして普通の引文にあらずと雖も假に茲に收む

〔補闕記〕 擎立軍鋒

〔補闕記〕 壬午年二月廿二日庚申大子無病而薨

時年四十九

備考 (24) (25) の二文共に豊浦寺阿彌陀寺安井門跡の三本にも注文として入る。但し安井本の(25)は初五字を本文に作り後八字のみ割註にしてある。

ホ、鑑真傳の文

(26) 大唐傳戒師僧名記傳云乃至利益四生云云(廿五上「棟梁三寶」の次三百九字)

備考 豊浦寺阿彌陀寺安井門跡の三本にも亦注文として入る。

へ、法華文句の文

(27) 文句云夢者乃至因此五事夢文(廿三上「放有此言」の次五十四字)

備考 同上

ト、其他

(28) 外書師博士學架等内典師惠慈高麗人(二下)

(30) 魁帥者大毛人也(三下)

(32) 左十二人右十二人(三下)

(34) 又云昇衣楷朴枝間云云(七下)

(36) 已上十九字傳文(七下)

(38) 或説曰以鞍作福利通事(十七下)

(29) 今在興福寺東金堂(三上)

(31) 長谷川也(三下)

(33) 今在古京之元興寺東金堂(四下)

(35) 定弓和順惠箭(七下)

(37) 是橘豐日天皇第二子也母穴太部間人皇女(九下)

(39) 今諸寺伎樂舞是也(廿二下)

- (40) 同月十五日(廿二上)
- (42) 正本在法隆寺綱封御倉(廿七下)
- (44) 時人名鵜僧寺(廿九上)
- (46) 上云皇后崩後以宮爲寺誤也太子爲建(廿九上)
- (48) 又名廣隆寺並宮賜秦川勝上云以宮爲寺誤也(廿九上)
- (50) 又名妙安寺賜蘇我葛木臣(廿九上)
- (52) 世人名爲立部寺又說以此寺爲太子(廿九上)
- (54) 本九院(卅上)
- (56) 此田村皇子也(卅下)
- (58) 或本無之(卅下)
- (60) 癸亥年天智天皇卽位二年也(卅三上)
- (62) 天智天皇也(卅三下)
- (64) 天智天皇(卅三下)
- (41) 是夷振歌也(廿二上)
- (43) 時俗號荒陵寺(廿九上)
- (45) 或說不入(廿九上)
- (47) 時人名菩提寺(廿九上)
- (49) 又名法起寺(廿九上)
- (51) 或說不入(廿九上)
- (53) 又名鵜尼寺已上二寺雖不入此本搜求記之(廿九上)
- (55) 諱息長足日廣額天皇高市岡本宮治十三年(卅上)
- (57) 諱天豐財重日足姬天皇明日香川原板蓋宮治三年(卅下)
- (59) 己巳年天智天皇卽位八年也(卅三上)
- (61) 諱天萬豐日天皇難波長柄豐前宮治十年(卅三下)
- (63) 今藤原氏祖也(卅三下)
- (65) 意指殺山背大兄皇子等之事(卅四上)
- 備考 右三十八所中(28)を阿彌陀寺本の本文に作ると、(31)(36)(42)(56)(58)(64)を豐浦寺阿彌陀寺安井門跡の三本に全く存せざるとを除きて其他の三十所は何れも三本に註文に作る。

二、本文 これも引用別に分つて

イ、曆録の文

(66) 曆録曰皇女懷胎之日乃至建難波荒陵東下(九下)「間人皇女」の次七十七字)

(67) 是復曆録文也(廿二下「爲皇祖母尊」の次)

ロ、補闕記の文

(68) 惣經一十二箇月矣入胎正月一日開誕亦正月一

日(二下「不覺有産」の次)

(69) 或說云一抱太子數月懷香故後宮爭欲奉抱及妃

亦加抱(二上「加寵愛」の次)

(70) 後以宮爲寺賜川勝造并賜寺前水田三十町寺後

山野六十町又賜新羅王所獻佛像幡蓋等物(十五下

「稱楓野之別宮」の次)

(71) 夢來之經復爲一卷黃襪紙黃玉軸綺帶漆題一件

書卅四字々太微細太子崩後王子山背大兄六時禮

拜丁亥年十月廿三日夜半忽失此經不知所去求之

〔補闕記〕 經十二箇月

〔補闕記〕 一說云一抱太子即數月懷香故後宮爭欲奉抱皇后亦屢加抱

〔補闕記〕 秦川勝率己親族祠奉不怠太子大喜即敍小德遂以宮預之又賜新羅國所獻佛像故以宮爲寺施入宮南水田數十町並山野地等

〔補闕記〕 太子薨後王子山代大兄日夜六時禮拜

此經癸卯年十月廿三日夜半忽失此經不知所去王

子大怪復以大憂

今在經者小野妹子所持也事在太子傳



無由王子大怪復以大憂今在院者妹子將來者(廿上)

〔是勸戒之訓也〕の次)

(72) 一說惠慈法師講說之日我朝使至通太子薨狀法師停講失聲大哭即命衆僧轉讀大乘既而語衆僧云聖德太子寔眞人也扶桑之下流通妙法日本之州演說微言吾自悟穎唯因太子山海異境心如斷金吾之至于今日存命故者而爲聞太子舉動也而今聞惠日蔽暉慈雲消潤吾生無驗不如追參仍擎香爐大發誓願々々曰生々世々必逢上宮聖王於淨土也吾以來年二月五田或說曰二月廿二日必死必死竟加其言明年二月廿二日無病而逝時人大異彼此大聖誰測甚深云々(廿八下「時人大異」の次)

(73) 一說辛巳年十二月廿二日斃太子愴之造墓今在中宮寺南長大墓是也(廿九上「埋中宮寺南墓」の次)

(74) 一記曰癸卯年十一月十一日丙戌亥時宗我大臣

〔補闕記〕 慧慈法師在高麗國聞之大慟奉爲太子講經發願々曰生々世々必逢上宮聖王於淨土也吾以來年二月廿二日必死竟如其言明年二月廿二日無病而逝時人大異彼此大聖誰測其際

〔補闕記〕 辛巳年十二月斃太子愴之造墓葬墓今中宮寺南長大墓是也

〔補闕記〕 癸卯年十一月十一日丙戌亥時宗我大

兒林臣入鹿致奴王子兒名輕王巨勢德大古臣大伴  
馬甘連中臣鹽屋連板夫等六人發惡逆計太子子孫  
男女廿三人王無罪被害今見計名  
廿五人王（廿一下「是略錄文也」  
の次）

(75) 又說庚午年四月卅日夜半災斑鳩寺（卅三上「猶不  
之止」の次）

(76) 一說調使麻呂者太子生年十三甲辰年始爲舍人  
時年十人癸亥年二月十五日出家爲僧（卅三上「即位八  
年也」の次）

備考 (26)を阿彌陀寺本に本文とし、又(75)を豐浦寺阿彌陀安井門跡の三本に又說以下廿一字本文此年  
以下十一字註文に分つものを除き、其他はすべて三本共に註文に入る。  
ハ、其他

(77) 平氏撰（一上）

備考 豐浦寺阿彌陀寺安井門跡の三本にも此の撰號を置く。

(78) 育後僅暮有二月矣（一下）  
(79) 卽太子之姑也（二上）

臣並林臣入鹿致奴王子兒名輕王巨勢太古臣大臣  
大伴馬甘連公中臣鹽屋枚夫第六人發惡逆至計太  
子子孫男女廿三王無罪被害今見計名有廿口王

〔補闕記〕庚午年四月卅日夜半有災斑鳩等

〔補闕記〕麻呂者聖德太子十三年丙午年十八年始  
爲舍人癸亥年二月十五日始出家爲僧

(80) ?以詐言(二下)

(82) 佛像一驅(四下)

(84) 生年十六(七上)

(86) 高數尺安吉野比蘇寺(十二下)

(88) 元居宮南因爲上宮今謂斑鳩宮猶爲上宮是也大子(十六上) (89) 此夜丈六(十六下)

(90) 大仁(十六下)

(92) 此寺與宮同基在宮之西也(十七上)

(94) 聖德太子傳曆上卷(十八下)

(96) 平氏撰(十九下)

(98) 是則殿下入定之時也(廿下)

(100) 七人(廿二下)

(102) 僅得宿于皇后御腹展轉修行功德稍重託生小國王族得昇儲日(廿五下)

(154) 合九院(廿九上)

(106) 今大安寺也(卅一上)

(108) 而曆錄不記此年是推古天皇十五年矣(卅三上)

(81) 大菩薩(四上)

(83) 卽太子之母也(六上)

(85) 時年廿二(九下)

(87) 德仁義禮智信(十四上)

(91) 是今橘寺也(十七上)

(93) 此寺間人穴太部皇后之宮也(十七上)

(95) 聖德太子傳曆卷下(十九下)

(97) 此殿在寢殿之側(廿上)

(99) 是今財人之先(廿一下)

(101) 託生周朝姚氏(廿五上)

(103) 四節文日(廿七上)

(105) 此時寺四十六院僧八百十六口尼五百六十九口(廿九下)

(107) 乎田女王(卅二下)

(109) 齊明天皇四年也(卅三下)

(110) 一説中大兄皇子叫奏曰以入鹿易天位歟(廿四上)

備考 右の中(82)(94)(100)(101)(102)(104)(107)の七文は豊浦寺阿彌陀寺安井門跡の三本にも見えずして恐らく現流本は後世の補註の遂に本文となりたるが如く而して(77)(79)(85)(88)(91)(97)(98)(99)(105)(106)(108)は豊阿安三本の、(83)(84)(86)(92)(93)(109)(110)は豊安二本の、(78)は豊阿兩本の何れも割註に現るゝが如きは其過渡を殘留するものと見るべく、(80)(87)(89)(90)(95)(96)(103)における豊阿安三本、(81)における豊安兩本、(83)(84)(86)(92)(93)(109)(110)における阿本、及び(78)における安本は現流本と共に此等後世の補註が遂に本文として轉寫されたものである。

以上菅家本と現流本並に豊浦寺阿彌陀寺安井門跡文庫の諸本を比較對照したる結果を要約するに豊阿安三本の菅家本に違して現流本に一致する個所は

豊浦寺本にては 7 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 23 24 25 26 27 28 29 30 32 33 34 35 37 38 39 40 41 43 44 45 46 47 48 49 50

51 52 53 54 55 57 59 60 61 62 63 65 75 (出重) 80 81 87 89 90 95 96 103 108 (出重) の五十八所

阿彌陀寺本にては 2 8 13 14 16 18 19 21 24 25 26 27 29 30 32 33 34 35 37 38 39 41 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55

57 59 60 61 62 63 65 68 75 (出重) 80 83 84 86 87 89 90 92 93 95 96 103 108 (出重) 106 110 の五十九所

安井門跡本にては 5 6 9 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 23 24 25 (出重) 26 27 28 29 30 32 33 34 35 37 38 39 40 41 43 44 45

46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 57 59 60 61 62 63 65 75 (出重) 78 80 81 87 89 90 95 96 103 108 (出重) の六十一所

ありて、現流本と同じく後の註記が轉寫の場合に本文と何等の區別なく書流されたものである。然

るに此の如き後の補註を其儘に傳へて未だ本文と混雜するに至らざりし個所を豐阿安三本に索むるに

豐浦寺本にては 66 97 68 69 70 71 72 73 74 75 (出重) 76 77 78 79 83 84 85 86 88 91 92 93 97 98 99 105 106 108 (出重) 109 110 の三  
十所

阿彌陀寺本にては 66 67 69 70 71 72 73 74 75 (出重) 76 77 78 79 85 88 91 97 98 99 105 106 108 (出重) の二十二所

安井門跡本にては 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 (出重) 76 77 78 79 83 84 85 86 88 91 92 93 97 98 99 105 106 108 (出重) 109 110 の二

十九所

これ實に現流本に移る過渡期の書寫たる所以にして、中に予の謂ゆる正本の面影を確保するものに

豐浦寺本に於て 1 2 3 4 5 6 10 11 22 31 36 42 56 58 64 82 94 100 101 102 104 107 の二十二所

阿彌寺本に於て 1 3 4 5 6 10 11 22 31 36 42 56 58 64 81 82 94 100 101 102 104 107 の二十二所

安井門跡本に於て 1 2 3 4 10 11 22 31 36 42 56 58 64 82 94 100 101 102 104 107 の二十一所

を擧げ得るは決して偶然でないのである。但し現流本に註文あるを反つて本文に作るもの阿彌陀寺本に12 15 17 20 23 28 40の七所、安井門跡本に25 (出重)の一所ありと雖も其は各底本を異にする爲に生じた少違として考ふべきであらう。

茲に於てか予輩は菅家本(享祿二—慶長?間の太子傳註傍の本文に對校されたる寛元三年菅原爲

長書寫)の正本たること、即ち後世の摺入ありと承認せらるゝ聖德太子傳曆の現存するもの、中に最も原本的なることを主張すると共に、豐浦寺本(太子傳傍註に現はれたる本文にして元と比蘇寺現光寺  
吉野寺の所出に係り文明五年之を豐浦寺より橘寺に出して轉寫せるもの)阿彌陀寺本(豐浦寺本の校異を太子傳傍註に轉記ものに見え其の原本は保安五年八四七の書寫にして法隆寺所出に係る故に同系統に屬する觀應二年二書寫の法隆寺現在本及び乾元二年六九書寫の阿波本願寺藏國寶傳曆よりも古き法隆寺所出本である)並に安井門跡本(所出及書寫年時未詳)は補註太子傳曆即ち後に脚註を加へられたる傳曆の原始的(就中豐浦寺本は一層然るが如し)なるものにして菅家本と現流本との中間にありて其の變遷を跡づくるものとして是認するに至つたのである。

かくて予は改めて菅家本の由來を顧み傳曆の作者並に撰時を追究するに先つて、菅家本と太子傳傍註との關係が恰も彼の弘願寺本校行信證(西本願寺教行信證の奥書を釋明すべき唯一の同本)と眞宗大谷大學圖書館藏弘願寺本校合寛文版教行信證との關係に於けるが如く、弘願寺本が已に焼失したる以上は明治十二年に寛文版に同本を校合されたるものに據るは當然なると同じく、菅家本にして現註を正に信すべきものなることを徹底して置きたい。

## 五

想ふに予の謂ゆる正本と考へたる菅家本なるものは未だ世に知られなかつたものではなからうか  
 聖徳太子奉讃と共に太子に對する各方面の研究頗る盛なる現時にして其の名蹟の全く聞えざれば爾  
 かく斷定するも亦可とすべきであらう。されど予は其の名又は類似の目を過去の文献注疏に發見  
 すべき望を懸けて諸書を尋ねしが、たゞ僅かに太子傳別要（東京帝國大學附屬圖書館藏二本あり  
二卷二册  
三卷三册文中に「其後丁年慶長十二年丁未マデハ九百八十八年」云々とあるから恐らく前記太子祭典展  
 觀目錄に見ゆる「慶長十二丁未年林鐘上旬之元寺門講談用意之時再作之畢、權律實秀」の奥ある寛文  
 十一年版太子傳撰集抄別要と同本であらう）「又木幡上人云此傳ニ爲長卿之點有之ト云々」とあるを  
 見出たるのみ。元より限られたる時間に身邊に近き雜書を檢索したに過ぎぬから他にも此の傳を記  
 すものがあるかも知れぬが其等も恐らく別要と同じく爲長點本即ち菅家本の實物に接手せずして單  
 に木幡上人の言として引くに過ぎないと想像せられる。而して又別要が慶長の作であつて彼の菅家  
 本を對校せる太子傳傍註も享祿慶長の作とせば此間に何等かの事實が伏在しはせぬか、或は當時  
 菅家本は法隆寺側にも別要に見ゆる如く全く知られなかつたではなかつたが古くから法隆寺に傳承  
 し來れる（例へば保安本以來）増註されたる傳曆に達する爲に顧みられなかつたのではなからうか  
 とも考へられる其は何れにもせよ別要には木幡上人との關係は明記して居るが上人は法水分流記  
 永和四年  
 靜見勘錄に「眞空定兼住木幡觀音院號大納言律師大納言定能摘子遁世之後號圍心論註作六卷抄十目作

「三卷文集」並に蓮門宗派天文十七年書寫に「木幡廻心上人真空三論宗真言宗本名大納言律師定兼大納言定能

猶子遁世後下向鎌倉住大繩無量壽院入滅件院後被成禪院畢」とありて、上人は彼の心記の作者藤原

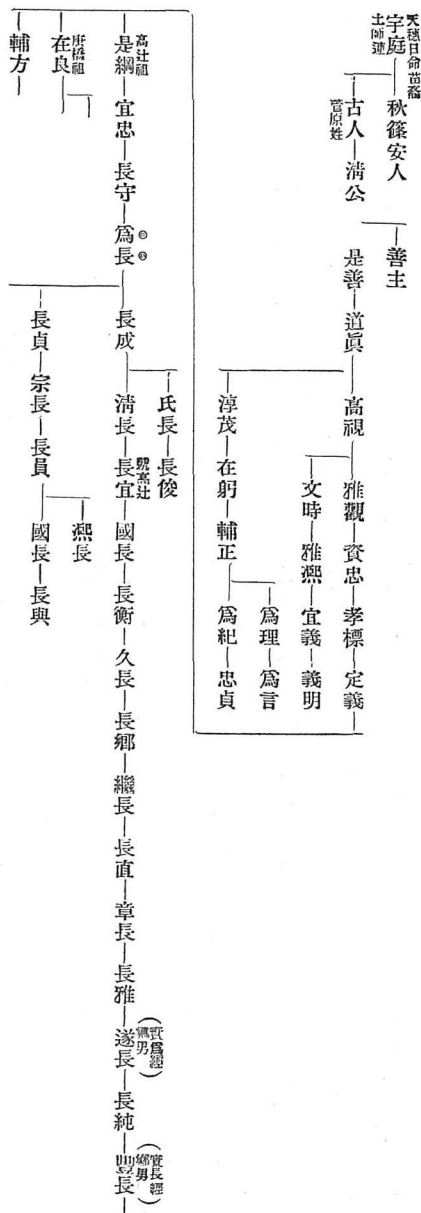
定能承元三寂の猶子真空のことで菅原爲長とは時代を同じくするから其の言は信するに足るとせねばな

らぬ。然るに今日まで此の菅家本は全く世に出でなかつたやうであるが、今や幸にも我が太子傳傍

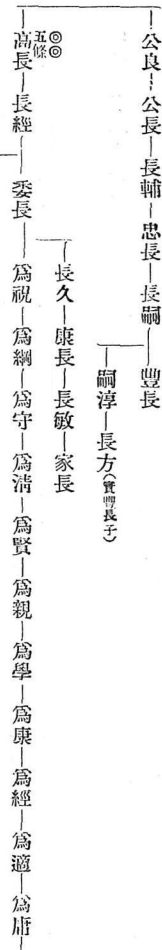
注に其殘影を現すことゝなつたのである。傍注の著者蒙潮が確かに現本を以つて對校したことは彼

れが「此自筆于今五條殿秘藏し給ふなり」と註記せるを信用すべきであらう。而して五條殿は菅原氏

の裔にして系圖を按ずるに百家系譜







即ち菅家本はの其の筆者爲長の子高長を祖とする五條家に襲藏することに些の不審はない。然るに向にも云へる如く傍注の著者の之を眼見したる當時のものには菅原和長の書入が存するより見れば其後高長の孫茂長を祖とする東坊城家に移つたものではなからうかと想像せらるゝが、和長の書入をも轉寫したる傍注の著者が今現に五條家に秘藏すると云へば和長の薨せる享祿二十年以後に於て五條家に保管したことは確實と見てよいと思ふ。言ふまでもなく和長の書入ありとて本書が必ずしも東坊城家に移ると云ふ積極的證左とならぬし、又此の如き詮索は極めて枝末の事に屬し要は菅家本太子傳曆が傍注の著者蒙潮の當時(享祿二十二年度長頃)に筆者菅原爲長の裔五條家に襲藏せられて居たことを確認すれば足るのである。然り而して予は上記の對照に見る如く此の菅家本が原撰の太子傳曆を傳寫せるもので正本と考ふべきものであることを主張する。されば古來傳曆の選者は種々論議されたが其等の殆ど全部が後世の増註攙入にかゝる部分に立脚せるものであるから今となつ

ては殆ど顧みるを用しない。彼の引用書の成立年時より論證せんと試みられた歴史的考察も増註攷入の年時を推測し得るに止まるであらう。茲に於てか太子傳曆の選述年時は他の方法に於て選索されねばならぬが、今の菅家本には左の識語を存して太子傳傍注の上冊表帑裏に紫黒にて書留られてある。

古本奥云延喜十七年九月藏人頭兼輔撰 (盛) 又云此書平兼輔卿貫首之時所撰也云々

按兼輔者光孝天皇曾孫篤行賜平姓其子兼輔也延喜十七八十八補藏人頭任中納言右衛門督承平三

二十八薨世號提黃門是也今度應尹宮所望清書此傳文加愚點者也 寛元三年八月 爲長(委在撮要講要)

右によれば或る古本(寛元三年より見て古本と稱し得る)の奥には藏人頭兼輔が延喜十七年八月に之を選した旨が出で、又一本には平兼輔の藏人頭(唐名貫主)の當時に選すとして年月を明記せぬものあれど何れも兼輔の選なること一致せるを見る。而して菅原爲長は之に對して何等異説を掲げざれば之に疑議を有しなかつたと考へる。但し此の古本が菅家本の原本であつたか否かは不明であるが謂ゆる古本並に又一本の奥書を摘記しながら其内容に言及せざるは、菅家本と大差なく恐らく同本なりしことを消極的に想像することも出来る。然れども右に爲長が考へたる兼輔に平姓を認むることとは隠かでない。此點に關しては右の識語の脇に墨書を以つて括弧内に示すが如く何人か考へて居る。其意は此の平姓に關する爲長の記載は兼輔を兼盛(正暦元寂)と訂すべく一本の奥に平とある

は本の誤寫であると云ふにある。而して委しくは撮要講要にありと註して居るが、傳曆の講録中この名を出すものに未だ接手しない。後日撮要講要なるものを發見するに至れば菅家本及び傳曆の選者選時に對し大に啓明する所あるかも知れないが、今は此の爲長の識語中兼輔と兼盛とを混同したるの非ありと雖も傳曆の選者として出す所は専ら兼輔にあるを信すべきであらう。然り而して公卿補任を案するに、兼輔は左大臣冬嗣公曾孫内舍人良門孫右中將利基の六男にして延喜十七年八月二十八日藏人頭に任せられしこと見え、古本の奥記に全く一致して居る。此年を承平三年二月十八日五十七歳薨去より逆算すれば四十四歳となり、兼輔の文藻に富める事は中納言兼輔集一卷、提中納言物語一卷並に古今、後選、新古今、新勅選、王葉、續千載、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺新續古今、續後選、三十六人選集等に散見する和歌に之をしのぶことが出來て、我が太子傳曆の風尙と相俟つものあるを覺ゆる。——予は有力なる積極的證左の舉らぬ限り、今日に於ては菅家本を以つて太子傳曆の正本と信じ、其の識語に現はれたる藤原兼輔を以つて傳曆の選者に充て、更らに其の選述年時を延喜十七年八月二十八日以後と定めて永觀二年の三寶繪詞所引より六十七年を朔ることゝなつた。かくて我が聖德太子傳曆は實に平安朝の初期に成れるものにして、其の原型は寛元三年八月八十九歳の高齡を以つて前參議正二位大藏卿式大甫菅原爲長の書寫せる謂ゆる菅家本に存する事を重ねて主張しない。而して享祿慶長?間に此の菅家正本を五條家に襲藏するものに就き

て太子傳傍注の著者蒙潮が其の本文に對校して今日の吾等に太子傳曆の正本を想定せしめたることを感謝する。更らに此の太子傳傍注に對校する菅家本の校異はすべて前記の如く紫墨を以つて記されて居る爲に、漸次褪色して今の状態は辛うじて之を讀み得るの程度といふべく、而して此より歲月を経れば終に全く之を識別し得ざるに至ることを附言して一と先づ此の未定稿を擲筆する。